

シネマ日記



No. 60

○月×日 アメリカ大リーグ、オークランド・アスレチックスのGM(ゼネラルマネジャー)、ピリー・ピーン。弱小球団を勝てるチームに変えた立役者として知られている。「マネーボール」(ベネット・ミラー監督)は、その男の半生を書いた同名ノンフィクションを映画化したもの。アスレチックスでは、財政難からスター選手を次々に手離す。そんなときにスカウトからGMに昇格したのがピリー(ブラッド・ピット)。ライバルチームの3分の1にも満たない低予算で強いチームを作るのにどうしたらよいかを悩む。そんな折、名門のイェール大で経済学を学んだ数学おたくの若者

と出会う。ピリーはこの若者とコンビを組み選手編成の大改革に乗り出す。出塁率などのデータ重視の統計分析手法で選手を選ぶことにしたのだ。たとえ無名でも実力があり、格安の選手がいるはず、と。後に「マネーボール理論」と呼ばれるものだ。新布陣で臨んだチームは連戦連敗から脱し、20連勝という「奇跡」を起す。経営学の教科書としての成功物語を描いただけの映画と思われるかもしれない。しかし、ピリーという実在の人物には、才能を期待され大リーグに入ったものの、成果を出せずに選手生活を終えた過去があった。高い契約金に惑わされ、自らの実力を見間違え、大学進学を諦めた苦い経験も描かれ、映画に厚みを与えている。プラビが、強気の裏で試合を見られないうどの不安や繊細さ、離婚した妻との一人娘への思いの深さなど、ピリーの人間味を好演している。

○月×日 「ウィンターズ・ボーン」(冬の骨、デブラ・グラニック監督)はアメリカ中西部の貧しい山村

が舞台だ。17歳の少女(ジェニファー・ローレンス)が、精神を侵された母親と幼い弟と妹の4人で、荒れ果てたログハウスに暮らしている。少女は、幼子の世話から食事など一人で切り盛りしている。しかし、食べる物にも事欠く極貧の状態だ。そんなある日、保安官がやってきて、保釈中の父親が姿を消したことを告げ、行方を尋ねるのだ。しかも「来週に予定されている裁判に出てこなければ、保釈金の担保になっているこの家は没収される」と言う。父親はドラッグの密造がばれて逮捕されたのだが、少女は住む所を奪われては生きていくことができない。やむなく父親を探しに、父親の犯罪仲間に出会って行くのだが、冷淡な扱いどころか暴行まで受ける。貧しさのため皆が犯罪に手を染めなければならない生きにくい中で、父親の居所など教えられない事情があるのだ。そんな寒々とした冬枯れの風景の中にも、やがて一筋の光らしきものが射す。生きていなくても、死んだことが証明されれば、保釈金

は没収されずに済むことがわかるのだ。少女は父親の骨探しに出かける。過酷な運命の中で、少女の健気さ、内に秘めた強さ、誇りが光り輝いている。

○月×日 こちらも少女がヒロインの物語。「やがて来たる者へ」(ジョルジョ・ディリッティ監督)は未来に生きる子供たちを意味する。第2次世界大戦下の北イタリアの山村。後に「マルザポットの虐殺」(44年)で知られる、ナチス・ドイツ軍による大虐殺事件が起きた。犠牲者771名の子供、女性、高齢者だった。この史実を、子供の眼差しで捉えたのが本作だ。8歳の少女の瞳に映るのは、敵も味方もない、殺し合いの恐怖があるばかりだ。そこには戦争の正義などはなく、殺し合いという本質が浮かび上がる。

○月×日 「コンテイジョン」(感染、ステイブン・ソダバーク監督)は、正体不明のウイルスが地球規模で発生するが、ウイルスよりも早く感染したのは人々の恐怖感で、パニックを増幅していく。(内藤哲)